
液晶画面の向こう側

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

液晶画面の向こう側

【Nコード】

N7748A

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

麻里愛さんはタレントです。彼女を取り巻く環境と連中のお話です（＾。＾；）

テイク1 【クイズ ミリ〇ネア】

「なんか緊張するなあ……」

「そりゃそうだろ。」

おまえみてえなパツパツパツパーがなんでミリ〇ネアなんかに……」

麻里愛は、セツトの裏で半泣きになっていた。

俺は今回、コイツの応援という名目で客席に座ることになっている。どんな珍回答してくれるのか楽しみでならない。

なんたつてこの女、ついこの間ニュースの

『ヨルダンのアンマンからの中継でした』
という言葉に対して、

「へえ、この国の特産つて『あんまん』なんだ。
でもなんか、言葉の使い方間違えてるよね」

とか言い出したんだから。

当然俺は、

「おかしいのはてめえだ!」

と突っ込み、

「あんまん(アンマン)ってのはヨルダンの首都の名前だよ!」

と、教育を施した上で、

「言葉を間違ってるのもまーちゃんだぞ！」

【間違えてる】じゃなくて【間違ってる】だよ！」

と、とどめをさしてやったんだが。

《地理系が来たら【ファイナルプライス0¥】の可能性満々だな》

時間が進むにつれ、一般の回答者がクイズに挑戦して、情け容赦無く薙ぎ倒されていく。

ようやくとこさ収録前のペーパーテストで悲惨極まる成績を残した麻里愛が早押し機の前に姿を現す権利を得ることができたようだ。

《あのネエちゃん……、反射神経だけはマト○ックス並だからなあ……》

案の定、

早押し並べ替えの時間は1・5秒という超人的なスピードを叩き出している。

言うまでもなく断トツで予選突破。

《まーちゃん、ぜってー半ブリッジで銃弾よけるな》

リアルマト○ックスを実行できる可能性はもはや、に達していそ

うだ。

み○氏に代わって番組の司会を今回から務めることになった門倉慶^{かどくら}
太^{いた}に

「今回の一抜けは……、門倉麻里愛さん！」

と呼び付けられる。

門倉と門倉。この二人、実は兄妹らしい。

門倉家は、両親共に芸能人であるがために、子供にも芸能人が多いのだ。

「麻里愛さん、今日の応援はどなたですか？」

という決まり文句を放ち、慶太が麻里愛に俺の紹介を促す。

「ピン芸人の佐野勇氣君です」

御存知の方もいらっしゃるだろうが、俺は死んでいる。

そして、麻里愛に取り憑いているのだ。

その結果、陰陽師の娘である麻里愛の潜在能力をいくらか引き出すに至った。だが、ただの取り憑き損というわけでもなく、麻里愛の霊力が増すことによって、俺は佐野勇氣として実体化できるようになっていた。

当然麻里愛の側でという限定条件付きで……なのだが。

「佐野さん、麻里愛さんは佐野さんから見てどういう人ですか？」

というみ○氏時代から続く慣用句を慶太が投げ掛けてきたため、

「麻里愛さんは、トラウマを【虎の革で作った馬服を着てる競走馬】
だと思い、ドイツの首都が【アルトバイエルン】だと本気で信じ込
んでた人です」

と、麻里愛の真実の一部を語る。

ちなみにアルトバイエルンとは某食品会社製のウインナーの固有名
詞であり、都市の名称ですらない。

当の麻里愛は顔を赤くして下を向いている。
その麻里愛に、

「そういえば麻里愛さん、タロットのハングドマンを【首吊りの絵】
だと思ってましたしね」

との御言葉で慶太がとどめをさす。

「佐野さん。
いくらぐらいまでイケると思いますか？」

との慶太の問いに、

「ぶつちやけ、10万円獲れれば両手を上げて大喜び。
100万円で日本沈没、
1000万円で地球が壊れますね」

《見込みは薄いなあ》

心からそう思う。

「それでは参ります」

いよいよきたか。

珍回答、迷回答、期待しておりますぞ……。

「門倉麻里愛さんの

……、クイズ ミリ○ネア」

テテテ テテテ テゝ

「次のうち、野球のポジションなのはどれ？

A 350ml缶

B 大ジョッキ

C 中ジョッキ

D ピッチャー」

……、かつ……、簡単だ！
簡単過ぎる！

流石は1万円の問題！

誰でも解るだろう。

……、……、……、……、……、……。

なんだ……？

この『間』は……？

「えつとお、あのお、そのお」

まさかまさか……。

「……、……、……お……、オーデイ……、エンス……」

《はっ……、早っ！！》

1万円でオーデイエンスかよ！？》

「……、ファイナルアンサー？」

そりゃ訊きたくもなるだろう。

1万円でライフライン。

いまだかつて見たことも聞いたこともないぞ？

「皆さん助けてください！

ファイナルアンサーです」

……使っちゃったよ……。

☐ A 0%

B 1%

C 0%

D
9
9
%

《 ！ ？ ！ ！ ？ ？ ？ ！ ？ ？ 》

居るぞ！？

B
1%居るぞ!?

《た……、たすけて……》。

肺が……、よじれるちぎれるはれつするう！！！！！！！！

9番 大ジヨツキ 佐野

なんのこつちや！！

ぎゃはははひひい！！！！！！

ひつ、ひつ……ひでぶ！！！！！！

まったく……。○

二回死んだらどうする気だ？
実体化した俺は死ぬんだぞ？

胸から腹にかけてやたら痛みだした。
嗚呼、困ったぞ……。

「 B 大ジョッキ」

はあ！？

まーちゃんまで俺を殺す気が！？

「……、……、……ファイナルアンサー？」

慶太も必死に笑いを噛み殺している。
馬鹿な妹を持って、心から

《ご愁傷さまです》

「嘘です。

D ピッチャー
ファイナルアンサー」

ビビらすなよ！

そんなこんなで10万円。

麻里愛は想像以上に粘っていた。

金が賭かると、しぶとさを発揮するタイプらしい。
「問題。

次のうち、ブラジルの首都はどれ？

A サンパウロ

B ブラジリア

C リオデジャネイロ

D マルセイユ」

出た！

地理系！

【ファイナルプライス0¥】確定の予感が高まる。

「ううん、たしか……」

かなり参っているようだ。

あんまん及びアルトバイエルン事件の犯人の麻里愛だ。
無理もない。

今度はどんな事件を起こしてくれるのだろう。

「マルセイユはスペインなんですよ……」

《！！！！

シェーーーーー！！！！》

マルセイユは……、

おフランスさんすううう！

そうくるとは予想だになかったぞ。

《油断したわ！

麻里愛!!!

無想転生を初めて見たときのラオウの気持ちがなんとなく理解でき
たぜ。

「マルセイユはスペインなんですけどねえ……」。

ブラジリア？

聞いたことないですね……。

リオデジャネイロってのはリオのことですよね？

「サンパウロもなんか聞き覚えはあるんですよ」

俺はスペインのマルセイユなんて聞いたことないですね。

「……、……、テレフォン……」

なるほど？

10万円だけでもテイクアウトしようというハラか。

「こんばんは！」

「皆さんは麻里愛さんとはどういう御関係ですか!？」

「家族です！」

姉の優里愛です！

兄の慶輔です！

姉の樹里愛です！

母の美和です！」

「やはりあなた達でしたか。」

麻里愛さん、……、只今10万円に挑戦中です……」

「じゅうまんえん!？」

「ぎやはは!!」

馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だあ!!!!!!

10万円の問題でライフライン!!

有り得ない有り得ない、ありえない!!」

「そんなんじや済みませんよ？」

麻里愛さん、1万円でオーディエンスです」

「ゲラゲラゲラ!!!!!!!!!!」

「制限時間は30秒です。」

どうぞ」

麻里愛が、問題を読み始める。

「次のうち、ブラジルの首都はどれ……」

「ブラジリア！」

以上！

あんたねえもつと難しい問題で電話使いなさいよ!」

問題文のみで答えたテレフォンを俺は初めて見たぞ……？
それぐらい簡単な問題だったのだが、

【あんまん】

【アルトバイエルン】

【マルセイユ】

の麻里愛さんだ。

解らないのも解る気がする。

「 B ブラジリア

ファイナルアンサー」

「正解」

「凄いです！

誰がこの展開を予想できたでしょう！？」

慶太が興奮気味にオーディエンスを煽りたてる。
かくいう俺も興奮気味だ。

「1万円の問題でオーディエンスを使い、10万円の問題でテレフ
オンを使った女ですよ！

なんと、50：50を残して【1000万円】です！！」

そう、麻里愛は今、ミリオネアに挑戦しようとしているのだ！

《ここまでできたら、獲得しちまえまーちゃん！》

こころなしか、本来ならあるはずもない鼓動というものが高鳴って
いくのを実感している。

テテテ テテテ テ

「クイズ ミリ○ネア！」

ついにファイナルクイズ。

「G1 NHKマイルカップ、秋華賞を勝ち、ジャパンカップを鼻
差2着した名牝、ファビラスラフィンの正確な名前の切り方はどれ？」

A ファビラス・ラフ・イン

B ファ・ビラス・ラフィン

C ファビラス・ラ・フィン

D ファビラ・スラフ・イン

……、……、……、サッパリ解らん。
俺でも解らん！

麻里愛は麻里愛で、呆然とあさつての方向を見つめている。
っていうか、目の焦点が合っていない。

「麻里愛さん。

テレフォンとっておくべきでしたね？

優里愛さん、J○Aのジョッキーなんだから……」

《!!!》

こいつの姉貴は騎手だったのか……。

それを【ブラジルの首都】で使ってしまったわけだ。

ここまで我慢していればサービス問題だったにも関わらず……。

《勿体ねえ……》

麻里愛はもう涙目で、

「50:50」

と言うことしかできないらしい。

「選択肢を二つに絞ります」

【A ファビラス・ラフ・イン

C ファビラス・ラ・フィン】

「ああ！

どっちも残ったあ！」

《考えてたのか!?》

だが、

ライフライン

【50:50】

の宿命といつかなんとか、必ずといっていいほど怪しんでいたものが、こっそり残る。

どうやらその浮き目を見ているらしい。

「じゃあない、やるか！」

なにやら麻里愛は、スカートのポケットをまさぐっている。
そして取り出したるは、100円。

「表にA、裏にC！」

《嗚呼、もう、神頼み運頼みしかないのですね？麻里愛さん……》

会場全体が麻里愛の味方となっている。

ビシッ！

宙に舞う100円。

手の甲と掌で……、挟み込む。

手の甲の100円。そこには、桜模様。

「C　ファビラス・ラ・フィン」

「なぜ、Cにしたんですか？」

「100円！」

「100円！」

金は金で獲得……か。
当たれば伝説だな。

《100円を1000万円に変えたってな》

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「正解!!!!!!」

そこには抱き合って喜ぶ俺達が居た。
こうして麻里愛の

【クイズ ミリ○ネア】

が、終りを告げた。

【門倉麻里愛、ファイナルプライス10'000'000¥】

追伸

麻里愛はその金を元手に、土地を購入。
アパートを建ててしまった。
なんとも現実的な……。

どうせだから【ホーンテッドアパート】にしちまうかな……。

END

テイク2 【二時間サスペンスドラマ 1】

今回の俺は、お化けに徹することになりそうだ。

麻里愛さん、二時間サスペンスドラマを撮影予定。

ああ暇そう

ほんとに暇そう

ちょー暇そう

詠み人、勇気……。

「なあ、まーちゃん今回どんな役回りなんだ？」

「ううー、なんか、また死にそう」

被害者役で初出演したとき、その死につぶりがとある監督の目に止まってしまい、それ以来、二時間サスペンスでは殺されまくっているらしい。

「せっかく月9の連ドラからオファーが来て

《やったやった！

やったああああ！！》

って思ってたなら、監督が寺前さんじゃない。

やな予感是有ったけど案の定最初の方で

きゃー……、ドサッ！

はい、終り！

……、なめんなー！」

どえらく御立腹だ。

その理由は当然、

「わたしだって、わたしだってさ、

《謎は全て解けたあ！》

とかさ、

《あなただったんですね、○○さん》

とか言ってみたり、

包丁構えて、

《うわあああー！！》

って相手に突進してみたりしたいよおー！！」

という言葉に尽きる。

《そりゃそうだよな》

「どうせ今回もさ、なんか性格悪いことやって、ぶすって刺されてドサッて死んで、終りなんだよ」

《まんまおまえじゃねえか》

心からそう思っていると、突然涙声になってしまった。

「わたしもう、二時間サスペンス出るの止めようかな……」

これは、究極レベルの爆弾発言といえる。

まだあまり売れていないタレントが掴んだ数少ない売りの一つを自分から棄てようとしているのだから。

「出とけ出とけ！

ぜってー出といた方がいいって！

実際に死ぬ訳じゃねんだから、何遍でも死にゃあいいんだよ！」

逆効果の気もするが、取り敢えずハツパをかけてみた。

「ゆーちゃんに何が解るの！？

わたしの何が解るってのさ！？」

ヒステリーを起こしてしまったらしい。

見事に逆効果だったようだ。

「だったら俺じゃなくてタッキーにでも相談しろよ！

俺なんかより、よっぽど解ってるだろ？

ったく、なんで俺なんだよ」

タッキーとは、かんばやし たかゆき神林隆行という男で、麻里愛の旦那だ。

別姓なのは、どちらも芸能人だからである。

「だよね、そうだよね。

解った。

タッキーに聞いてもらっわ」

撮影当日、俺達は京都のロケ現場に向かっていた。

一ヶ月前に受け取った台本は結末までは書かれていない。

もしかすると、俺も暇な思いをしないで済むかも知れない。

ちよつとしたミステリーナイト仕立てになっているのだ。

俺は推理となると結構うるせーぞ？

麻里愛は買ったばかりのレガシーで現場へと飛ばす。

つい最近、事件に巻き込まれた【死の交差点】を通過しなければならなかったが、そこにはもう七海はいない。なんの問題も無く通過できた。

レガシーが停まった先は、何やら時代がかったセットの並ぶ大江戸チックな場所だった。

《？

大江戸八百八町になんの用なんだよ？》

その空間に一歩足を踏み入れると、

「麻里愛殿、気分はもう江戸時代に生きておるようでごさるなあ」

となつてくる……、だろ！？

俺、間違つてねーよな！？

なのにこの麻里愛さんときたら……、

「べつにい」

の一言の元にソップを向いてしまったのだ。

《こうなったら最後まで侍調で通してやるぜ!》

もはやこうなつては俺にも意地がある。

なんとしても麻里愛を江戸調に染めてやりたくなった。

……、だが、ここで気付いてしまったのだ。

さっきの心理描写が現代調だったことに。

《くう……、む、無念……》

悪代官の手下にバツサリ殺られた気分になつてしまった。

暫くセツト村を進んでいったが、相変わらずそこは、大江戸八百八町だ。

そして……、

《ちよちよちよちよんまげえええええ!?!》

俺は見てしまったのだ。

まげを結った侍が携帯片手に、マルメンライトをフカしながら爆笑しているのを。

《なんだなんだ!?!》

大岡越前か!?!

遠山の金さんか!?!》

サスペンス……、それは、推理する事よりもストーリー展開に重き

を置いているタイプの推理物を指す。

そういう観点で見れば、【大岡越前】も【遠山の金さん】も時代設定を除けて考えるなら、立派なサスペンスドラマなのである。

が、

俺は確かに台本を見た。

確かに見たのだ、【太秦時代村ツアー殺人事件】と書かれてある表紙を。

ほぼ間違いなく現代物であると考えていいタイトルだ。

【ツアー】である。

時代設定は、少なくとも昭和中期以降の筈だ。

なのに、ちゃんまげ。

《許してちゃんまげええええええええええ！！》

あまりの理解不能さに、発狂寸前まで追い込まれてしまった。

続
く

テイク3 【二時間サスペンスドラマ 2】

俺命名【許してちゃんまげ殿】は携帯電話を一旦切り、そして、新たに操作し始める。

そうこうしている間に、麻里愛の携帯電話が、新たなメールの着信を告げた。

携帯電話本体を開くと、新着メール一件と表示されており、読んでみると、

【なんだ？

まだ生きてるのか（。o）

とつくに死んでると思ったのに（^。^；）

今回はしぶてえのか？

それとも撮影がまだなのか？】

とのお言葉。

有難迷惑な差出人様の名は、

【ちょいピンボケ？

是非ファジージャイロ機能を！】
様だ。

《なんのこっちゃ！！》

訳が解らん！

新手の迷惑メールか？

許してちょんまげ殿は、なおも携帯電話を操作し続ける。

一心不乱にボタンをプッシュし続けるその姿は、何かに取り憑かれているかのようなのだ。

麻里愛の携帯電話が、またメールの着信を告げる。【死ね死ね！

お前は死ぬしか能がねえんだよ！

なんて誰も思っちゃいねえから、安心して殺されてこい¥（ハ―ハ）
／

麻里愛が震えてき始めた。

もはや涙目になっている。

差出人は、

【刺激する度に

生えてるところも叩き

櫛に髪が絡み付き

抜ける

byスリル改め《ハゲる》】

様だ。

「ゆーちゃん……」

《！！

俺かよ！？》

確かに、確かにこの【スリル改めハゲる】は表向き【替歌芸人】として麻里愛さんに献上する【生活費】《俺、飯食わねえのに……》を稼がされている俺が編み出したネタの一つだ。

だが、

「俺じゃねえって！

マジ俺じゃねえんだって！」

神に誓って断言できる。

決して俺ではないのだ。

それなのに……、

「後でたっ……、……、……ぷり、袂い清めてあげるからね」

落涙しながら満面の笑みを湛えるという、世にも恐ろしい行動と共に、殺意がみなぎる言葉を投げ付けてきた。

そんなことをされたら堪らない。

麻里愛さん、陰陽師としての能力に目覚めたのはつい最近のことで、なにぶん、手加減というものが出来ないのだ。

間違い無く、消滅させられてしまう。

《なんとか誤解を解かねえと》

「ねえ、ゆーちゃん、お化けって死ぬとどうなるのかな？

やつぱり消えて無くなっちゃうの？

見たいなあ」

「見たいと言っくなよ！

ホントに俺じゃねえの！

まーちゃんだって貢いでくれる奴が減るの、勿体ねえだろ！？
だから俺を消すなんて止めようぜ！？

な！？」

必死の説得を試みる。

「だあめええ……！」

その目には狂気の色さえ浮かんでいる。

もはや一刻の猶予も許されなかった。

早急に対処しなければこの場で被い清められかねない。

麻里愛は、とうとう陰陽師御用達の【お札】をバッグから取り出すと、俺に張り付けようとにじり寄って来た。

「あまねくチミモウリヨウ、悪霊怨霊の類に当たる者達よ……、此よりこの現世に存在することを……」

なにやら恐ろし気な呪文を唱え始めている。

「たっ、たっ、助けて！」

助けて助けてえ！」

俺にはもう、命を乞うことしかできない。

その刹那、助け船を出してくれた者がいた。

麻里愛の携帯電話がメールの着信を告げたのだ。

この状況で、例の中傷メールが入ってくれば、俺の潔白を証明してくれるなよりの証拠となる。

なんたって、俺は両手を前に突き出して、麻里愛の目を真っ直ぐに見据えながら後ずさっていたのだから。

メールを打つ余裕などない。
ある筈もないのだ。

【TIME AFTER TIME】
から始まった着うたのDARIAは、もう

【切なさの風に舞う】
まで達してしまっている。

「まーちゃん！

メール！

メールメール！！」

着信に気付いた麻里愛は、

【ちちっ！】

という、北斗の拳のような舌打ちをしながら携帯電話を取り出して
開く。

【おいおい、お化けに八つ当たりかよ（^。^；）

そんなだからお前は、性格悪い演技が堂に入っちまうんだよ

¥（^ー^）／

諦めろ、お前みてえな性格ブスは、被害者にしかなれねえよ（^O
^）】

《来たー！

来た、来た来た来たあ！》

差出人は

【Mr' Child冷蔵庫】

様だ。

「た、……たすかった……」

そして、俺達の疑惑の目は、なおも携帯電話を操作し続ける、許してちゃんまげ殿に向けられていくことになる。

麻里愛がおもむろに携帯電話を取り出して、ボタンをプッシュし始める。

一連の作業を終えると、それを耳へと当てた。
どこかに電話をかけたようだ。

《!!》

一瞬耳を疑った。

許してちゃんまげ殿の携帯電話が、着うたを奏で始めたのだ。
あまつさえ、その着うたは……

【泣かないで僕の MARIA】
と歌っている。

そう、その名もズバリ、【MARIA】という曲なのだ。

着信のタイミング。

そして、【MARIA】……。

もはや、疑いを差し挟む余地はなかった。

十秒後、許してちゃんまげ殿は、鬼神の如く怒りに髪を揺らめかせる麻里愛と、機嫌の悪さでプチ怨霊と化した俺との挟み撃ちに遭うこととなる。

「タツキー。」

「こーんにーちはー……」

満面の笑みだ。

ただし、顔中に血管を浮かべての……。

「うーらーめーしーやあああー……」

マジ恨めしい。

麻里愛は指をケンシロウのようにポキポキと鳴らしながら、俺は首から血しぶきを噴出させながら、許してちゃんまげ殿、もとい、神林隆行へと詰め寄って行く。

「ぎゃああああー!」

……、
【合掌】

続く

テイク3 「二時間サスペンスドラマ 2」(後書き)

なんか、二時間サスペンスから脱線しちゃいましたね(^。^;))

次回、撮影開始です

(^o^)/

テイク4 「2時間サスペンスドラマ 3」

さてさて、タッキーこと神林隆行も成敗してやったことだし、俺達は、ここどこかにあるだろう集合場所に行かなくてはならない。

まだ売れていない麻里愛は、お出迎えの車など出してもらえる筈もなく、必然的に現地集合、現地解散となってしまうのだ。

「で、あんたはなんでここでこんな騒結ってる訳？
今回はなんの仕事なの？」

「つておい！」

なにやら隆行とお話を始めてしまっている。

時間が無くなつて来ていることは明らかなのだが……。

《どうせ大岡越前か、遠山の金さんだろ》

紋付き袴。

この時点で水戸黄門は却下されるし、たかだかおかつ引きである銭形平次の可能性も薄い。

「鬼平犯科帳」

《それかあ！

それがあつたか！》

まさに、盲点だった。

あの赤提灯に、海賊帽のようなヘルメットという二点の印象があまりにも濃く、火付盗賊改方のユニホームもまた、紋付き袴であった

ことをすっかり忘れてしまっていたのだ。

「どうしてくれんだよ……。
まだ撮影終わってねえのに……」

もはや半泣きになっている。

「股間の黄色く染まった紋付き袴でやんな」

《麻里愛さん……、そりやまたおきついお言葉を……》

俺としても、この一言には同情を禁じ得ない。

俺達が喰らわした精神的プレッシャーにしっかりと潰れていたのだ。

「だあれが悪いのかにやー？

あたしなのかにやー？

ゆーちゃんなのかにやー？」

言うまでもなく、俺達はなんにも悪くはない。

この件における責任は、十割隆行にある。

「だっておまえ、凄くいじけてたからハッパかけてやろうかと……」

「あんたがくれたハッパのお陰で、いい感じに絶望的な幻覚を見れたわよ……」

またあの中傷メールを思い出してしまったらしい。

満面の笑みを浮かべている。

ただし、やはり顔中に血管を浮かべ、引き攣り切っているのだが…

…。

その様子はまるで別なハツパを頂いた直後のようだ。

「さあ吐きな！」

うちのスタッフがどこに集まってるのか！」

成程、わりかし広い撮影所を探して回るよりは、うちのスタッフより早くから現場に詰めているであろう、この男に訊くのが一番楽だし確実だと判断したらしい。

俺も探すのは面倒だから、加勢することにする。

「はかねえと……、たたるぞ……」

首の古傷から、血しぶきを撒き散らすことも忘れない。

すると突然右の肩口に、激痛を伴う投的を喰らった。

本来痛みなどとは無縁な筈の俺に、痛みを与える攻撃が加わる、それは則ち麻里愛以外の能力者が直ぐ側に存在することを示している。

この世界、俺が見えるやつが多いだろうことは解っていたが、まさか、能力者まで居ようとは……。

麻里愛にすら手を焼いているというのに、これではまさに針のむしろだ。

「うおーとーこだつとうあらっ」

どこからともなく歌声が聞こえてくる。

どうやら、銭形の親分のおでましらしい。

銭形平治に鬼平犯科帳。

これに水戸黄門と大岡越前が加われば、大江戸オールスターズが勢揃いだ。

おっと、遠山の金さんと、暴れん坊將軍の吉宗を忘れるところであった。

以外とメンバーの多い、大江戸オールスターズに驚きを隠せなかったが、それを上回る驚きが、平治親分から放たれた。

「よつつにいくあゝけるうゝ」

「えっ!？」

そんなにあんのかよ!？」

自分が姿を消しているにも関わらず、当たり前突っ込んでしまった。

平治親分は、無視して続ける。

「だれがよんだかつだれがよんだかぜにがとうあへいすい」

「いや、呼んで無いから!

って言うか、どっちかつつと、帰って欲しいっす……!」

気付いた時には、平治親分の歌声は直ぐ足元に到達していた。

「はなあのおゝえどゝのはっぴやくやあちょおゝおおおうおう

お」

「いやここ、京都だから!

見た目八百八町だけど、京都だから!」

突っ込みながらも、親分の位置を確認することを忘れない。

親分は、直ぐ足元に居た。

その男の名は、門倉慶太。

いつぞや、ミリ○ネアで見たことのある、麻里愛の兄だった……。

「けいたくん？」

俺、あんたの体通したまんまで実体化するぞ？

俺もう、自分の意思で出来るんだぞ？」

余りに頭に來たため、威しを掛けてみる。

只の威しではなく、実際にやってみる気も満々だ。
とにかく機嫌が悪いのである。

「あのさ慶太くん、うちの撮影スタッフどこに詰めてるか、知らないかな？」

ちよつとはぐれちゃった気味なんだよね……」

突然麻里愛が、己の恥を晒し始めた。

《やっぱり迷ってやがったか……》

情無さ過ぎて、掛ける言葉も見付からない。

全ての元凶は、この女の方音痴さなのである。

ここへの案内看板が出ていたにも関わらず、ここへ来るまでに八人に訊いて回っていたのも麻里愛であるし、ここへ着いてからも、既に二人に訊いている。

それより何より、一番の問題は、現地集合、現地解散なことなのである。

つまり、この女が迎車を回して貰える立場であれば、全く問題は無かったのだ。

「……、門倉の……」。

オメエの目は伏し穴かい……。オメエらのスタッフなら、すぐそこに集まってんじゃねえか」

親分調で慶太が指差すその先には、確かに、何やら慌ただしい雰囲気の人ばかりが出来ていた。

現段階で、麻里愛は既に五分遅刻している。

寺前監督というのがまた時間に小煩いおっさんらしく、五分遅れた程度で慌ただしくなることも充分に有り得るのだ。

その点でも慶太の言う、あそこの連中だという言葉がにわかにリアリティーを持ち始めてくる。

麻里愛はもうあの連中であると確定してしまったらしく、

「ありがとう、慶太親分！」

今度なんか、美味しいもん奢ってあげるからね！」

との礼をのべて、右手を挙げながら、猛ダッシュをかける。その際、

「タツキーには、高級レストランのフルコース奢ってもらうからね

！！！！！」

と、恨みつらみたつぷりに怒鳴り付けることも忘れない。

「おう、神林の。

オメエもまた……、とんでもねえ女貰っちゃったもんだなあ……」

親分が隆行にかけた同情のセリフが、おそらく麻里愛には聞こえていないだろうことは、彼にとっては幸運だったのかもしれない。

麻里愛はもう、この時点で撮影の輪に加わり、意味不明な言い訳を述べ始めていたのだ。

ここからの距離は、軽く見積もっても80mは有るだろうか。

ついこの前には、沖縄野球園の始球式で159キロという、非常識

極まるスピードのストレートをブン投げていたし、この女の肉体構造は、いったいどのようになっているのか甚だ疑問である。

少なくとも、【女】という範疇からは軽く逸脱したハイブリッドな存在であることは、間違い無いだろう。

そんなことを考えながら、俺も麻里愛の後を追った。

続く

テイク5 【二時間サスペンスドラマ 4】

麻里愛が、驚異の運動能力を発揮して撮影スタッフの輪に加わっていく。

「監督！ ごめんなさい！」

いつもの麻里愛なら、間違い無くこのタイミングでガキ臭いアリバイ工作を始める筈なのだが……、

「あの……、わたし、時間までにここに入ってたんですけど、ニャンまげに飛び付こうとしたらかわされて……」

……、ニャンまげと来たか……。

「地ベタに這いつくばったところに、立て続けにヒップアタックとボディープレスを喰らった上に……」

……、ニャンまげの時点でもう無理なのに、まだ続ける気のような。なんとも遅しい（しぶとい）女である。

「トドメのパワーボムを喰らってしまったって……、あの……、一時間ぐらい、意識が飛んでたんですよ……」

このアリバイが通る可能性は、亀に腹筋が出来る可能性より薄いだろう。何と言ってもニャンまげだ。

ニャンまげなのである。

おそらくは、彼女が寺前監督なのであろう。麻里愛の目の前に居る長身痩躯で茶色がかった金髪の女が、こめかみや頬をピクピクと震わせながら般若のような狂った笑みを浮かべている。

「ニャンまげは……、日光江戸村の……、はっ……、筈……、筈なだけで……」

寺前監督は、怒りを抑えるのに必死のようだ。もはや、二の句を継ぐのがやっとの状態である。間違い無くこれ以上ニャンまげ方面

でのアリバイ成立は、粘らない方が良さそうなのだが、
「いや、でもほんとに居たんですよ、ニヤンまげ……」

もう無理だ。絶対に無理である。太秦映画村にニヤンまげが居るなどということは、名探偵コナンの黒の組織の【あの方】が阿笠博士であるというのと同じレベルの……、いや、ジンとウォツカが【ビダルサースーン】のCMで、

「どうです兄貴！ サロンのまとめり、キープしてやすでしょ？」
などとやっているのと同レベルの、あつてはならないことなのだ。

我慢の限界に達したのであろう、寺前監督はこめかみと頬だけではなく体全体をプルプルと震わせ始めた。そして、地の底から沸き上がって来るかのような恐ろしい怨嗟の声を、その、薄く大きな唇の間から……、放った。

「麻里愛ちゃん……、一編死ななきや解らないみたいね……」
言い終わった刹那、寺前監督は力士のごとき強烈なぶちかまし（トペスイシード）を麻里愛に対し、敢行していた。

麻里愛はひとたまりもなく吹き飛んでいく。相手も女とはいえ、身長差は優に30cmはある。この結果も止むを得ないだろう。そして、あまりの刹那的な出来事に俺を含む、周りに詰めていたスタッフやキャスト達はみな身動き一つとることが出来なかったのだ。

寺前監督の波状攻撃はまだ続く。着地と同時に大きく跳び上がり、まだ空中遊泳中である麻里愛の腹部に座り込んで、そのまま落下し、落下と同時にまた跳び上がって、今度は、体全体で落下。寺前監督の空中殺法を受ける度に、

「ぐふっ……」

「あぶっ……」

とうめき声をあげていた麻里愛の頭と股間を握り込んで頭上に持ち

上げた寺前監督は、そのまま力任せに地面に向かって、それを投げ付けた。

「ぎゃん！」

まるで外国人であるかのような悲鳴をあげた麻里愛は、口から黄色い泡を吹き白眼を剥いて痙攣していた……。

「おまえはもう、死んでいる」

寺前監督がオリジナリティーの欠片もない決め台詞を吐くと同時に、麻里愛の痙攣が……、止まった。

寺前監督。この女が麻里愛に攻撃を仕掛けてからここまでの所要時間、53秒。その間に繰り出した技、トペスイシード、ヒップアタック、ボディープレス、パワーボム。

どうやら彼女には、麻里愛に引けをとらない身体能力があるようだ。ピン芸人佐野勇気としての俺と共に仕事をやる日が……、

永久に來ない事を心から願いたい！

追伸

麻里愛は思いの外に重症だったため、キャストから降ろされてしまった。ちなみに、配役は……、

探偵だったそうだ。

E
N
D

テイク6 「ズバリ言っちゃってもいいですか？ 駄目でも言わせて頂きますが

ユウキです……。

最近まーちゃんが、結界張って近付けんようにするとです……。

ユウキです……。

最近『風呂やトイレを覗かれてる気がする』とかって因縁つけられました……。

ユウキです……。

道に迷って探偵役降ろされたのを俺のせいにせんといってください！

ユウキです……。

ユウキです……。

ユウキです……。

乗っけからちよつと愚痴ってみる。

最近のこの女の振るまいが余りにも酷すぎるのだ。

いつぞやの迷惑メールの件もそうだが、とにかく麻里愛に不利なことが起こるとなんでも俺のせいにされてしまう。

神様、あんたのご利益が生きた人間限定じゃないならば、是非俺を救い上げてやってくれー！！

なにやら嫌な予感がする。

とてつもなく嫌な予感がする。

今日の麻里愛はなんとバラエティーに出演、その番組というのが……、超ぶっちゃけ占い番組【ズバリ言っちゃってもいいですか？駄目でも言わせて頂きますが】なのである。

普通のお姉ちゃんならこきおろされるのを適当に聞き流し、笑えないギャグを笑って聞き流し、そして、生き方のアドバイスを真剣に……、聞き流していればよいのだろうが、麻里愛の場合はそうは行かないと思われるのだ。

この女、過去の出来事も、家族構成もどちらも凄まじく後ろ暗い。その上麻里愛自身もかなり喧嘩っ速いと来ているからもう、ほぼ間違いない波乱も二波乱も有りそうな気配なのである。

人は必ず開けてはならないパンドラの匣を持っているという。

普通はこの匣を開けることは極力避けるものであるが、この番組はあえてそれを開けることを旨としているのだ。

麻里愛さん……、陰陽など発動しなければいいのだが……、とても心配だ。

某テレビ局内の撮影スタジオ。
沢山並んでいるテレビカメラを、撮影スタッフが必死に操り飯の種にしている。

まず左手から、司会を務めるアイドルユニット【シュツルム】の連中。

そして番組の顔、霊能アドバイザー河山寿春。
さらにゲストの門倉麻里愛。

そして、俺……、ってそれ、かなりヤバイ気がする。
なんと言っても相手は霊能者だ。
間違い無く見咎められてしまう。

まあ、俺に話題が集中すれば、麻里愛が生放送中に陰陽の秘術をお茶の間に披露する確率は極めて薄くなるのだが……。

さつきから気になっている。

寿春はどのタイミングで切り出してくるのだろう。

ヤツは間違い無く気付いている。

さつきからかなり怪訝そうに飛ばしている俺への視線が何よりの証拠だ。

寿春が少女のようなつぶらな瞳をシュツルムの連中へと向け、

「えーっと、何から始めればいいですか？」
と問うた。

てめえの番組で何から始めるのかとは何事だと心の底から思ったが、なにぶん今日は【とにかくよた話に終始してくれと一生に一度のお願いをしたい日】ワーストワンに輝く日である。

かえって好都合だ。

シュツルムのリーダー小山一彦が意味有り氣に不適な笑みを浮かべて、

「あなたがそう訊いて来るといことは……、なんか居るといことですね？」

かなりとんでもないのが……」

と切り返してきた。

どうやら霊が取り憑いているゲストが来た時のお約束の行動らしい。しかも、悪霊が……。

《……終わった……》

俺はいったいどうなるのだろうか。

霊能者と云うだけあって、除霊能力は確実に有るだろう。

《ああ、神よ……、哀れな佐野勇氣にどうか救いの手を……》

続く

テイク7 【ズバリ言っちゃってもいいですか？ 駄目でも言わせて頂きますが】

麻里愛さん、超ぶっちゃけ占い番組【ズバリ言っちゃってもいいですか？

駄目でも言わせて頂きますが】に出演中。

コメンテーターは【霊能アドバイザー】河山寿春。

かなりヤバイとは思ってたんだが……、ヤツは、俺のことを怨霊だ
と思っってしまったらしい。

《どうなる、俺え！！

続くう！！》

勿論、手持ちのカードは【封じ、消滅させられる】【被い清められ
る】【強制成仏】の三枚しか無い。

寿春は、俺をまじまじと視線で舐め回しながら、言葉を選んでいる
最中のようなのだ。

《そんなクリクリなお目々で見つめないでくれ。
惚れちまうじゃねえか》

こんな歳端もいかないうな女の子（実年齢は30歳らしいが）が
俺を成敗しようとしているなんてとても思えないし、思いたくもな
い。

「じゃあ……、スピリッツから診ていきましようか」

スピリッツとは、確かスピリット（精神）の複数形の筈だ。

この女には複数の精神が混在しているとでも言うのだろうか。

「うーん、貴方の場合は珍しい事に、ツではなく、トなんですよね……。
ヒトの精神構造って言うのは、だいたいが当人を取り巻く霊的な力が影響してくるために、取り憑いてる霊のほぼ全ての精神や、前世の精神とかが入り混じって構成されるんですが……」

なるほど、だからスピリッツなのか。

じゃあ、麻里愛がスピリットなのはなぜなのだろうか。

「貴方の精神は、たった一体の高級霊の精神の丸写し状態になっています」

高級霊？

確か麻里愛には、俺と七海しか取り付いていない筈なのだが。

《俺って、ハイグレード？》

「その低級霊。

あんたじゃないから気にしないでいいよ」

苦笑いしながら寿春が突っ込んできた。

必死に笑いを噛み殺す仕草が悔しいが、……なんとも可愛らしい。

寿春に、異性としての魅力を感じてしまった照れ隠しに、

「低級とはなんだ、低級とは！」

と怒鳴り付けてしまった。

「じゃあ、下等霊の方が良いのかしらね？」

「どっちも一緒じゃー！」

だめだ。

ラチが明きそうに無い。

このオバハン可愛い顔して麻里愛並に、いや、それ以上に性格がきつらしい。

「あの、ゆーちゃんじゃないなら、ナナですか？」

喧嘩腰の俺達の間麻里愛が割り込んできた。

低級霊、下等霊というキーワードで即俺だと判断されたことに、そこはかとなく憤りを覚える。

「ナナさんっていうんですか、もう一体の低級霊。彼女も全く関係ありません」

七海、このオバハン……、崇っていいぞ。

「麻里愛さん、貴方は、たぶん絶対に認めないでしょう。

貴方は彼を、地獄、現世、あの世の三界に存在する全ての者の中で、一番嫌っています。

でも、そろそろ受け入れてあげないと、貴方自身が壊れ始めますよ？

【彼が貴方そのものなんですから】」

その言葉で連想されるモノ。

七海が麻里愛の世話になる原因の事件を引き起こした元凶。

16年も昔に、今現在も語り継がれている【スノードロップ大量殺人事件】を起こした伝説の殺人鬼、

【赤星拓真】

この男は、麻里愛の父親だ。

凶悪犯だった筈なのに、なぜか、あの世（天国）へと逝けてしまっている。

それどころか、神格を持つ高級霊として確固たる地位を確立していた。

「もういいです。

続きは……、言わないでくれますか……」

言わなくても拓真であることが判ったということなのだろう。

麻里愛は寿春を睨み付けることで牽制しながら、言葉を阻んだ。

「貴方、番組のタイトル忘れた訳じゃないでしょ？

【ズバリ言っちゃってもいいですか？】」

「だっ……、駄目でも言わせて頂きますが……」

なるほど、こういう使い方をするための、この無駄に長いタイトルだったのか。

この番組に出た以上、言われることは予め覚悟しておけということであるようだ。

しかも、【駄目でも言わせて頂きますが】の部分で、ゲスト自身の口から言わせている。

当然、それを言った瞬間にゲストは言われることを了承したことになる。

《このオバハン、してくれることがいちいち小憎らしいじゃねえか……》

「貴方のスピリットは、貴方のお母さんの丸写しなんですよ」

……、……、……、……。

「「えっ!?!?!?」」

余りの意味の解らなさに、二人でハモってしまったぞ!?
寿春のオバハンはさつき確かに【彼】と言っていた。
彼と言っていたのだ。

なのに、お母さん。

麻里愛は男同士で性交することによって、男から産まれてきたとでも言うのか?

そんな筈はない。

麻里愛の母親は岩国神奈と言って、立派な女性である。

拓真が引き起こした七海騒ぎの時、直接会ったこともある。

間違い無く、麻里愛の母親は女性なのである。

神奈さん、あんたもこのオバハン……、崇っていいぞ。

それにしてもこの河山寿春、とんでもなく根性の座った女であるようだ。

麻里愛自身とそれを取り巻く霊体の全てを敵に回して、なおもとても可愛らしい微笑みを浮かべている。

薔薇には鋭い棘がある。

どうしてこうも俺の周りの美女連中は、こんなばかりなのだろう。

初めは異性として意識していた寿春に対して、今は残念がらうつとうしさしか感じていない。

続
く

テイク 8 「ズバリ言っちゃってもいいですか？ 駄目でも言わせて頂きますが

美少女系性悪オバハン河山寿春による、霊能占い番組「ズバリ言っちゃってもいいですか？ 駄目でも言わせて頂きますが」に出演中。寿春が麻里愛のパンドラの匣を開き、一触即発状態と化したのが、その後に続いたおたんこなすな一言によって只今、スタジオは大混乱が巻き起こっている。

その一言とは、

「あなたは【彼】そのものなんですから」

という言葉のすぐ後に続いた、

「あなたの【母親】の丸写し」

と言う言葉。

もはやすつとこどつこい以外はおたんこなすしか無いといった状況だ。件の母親は族上がりの超じじゃ馬。この言い草を聞き付けて、是非ともこの失礼なオバハンを祟り尽して頂きたいものだ。

スタジオに組まれた、幻想的なセットは、ほんの少し後方に回り込むだけで、所詮木の板を貼っ付けてあるだけのお粗末な造りのセットなのだと言うことを嫌と言うほど思い知らせてくれる。

所詮セット、されどセット。その幻想的な雰囲気は、麻里愛の不安と混乱を煽りたてるには充分過ぎる役目を果たしている。

「あのー、わたしのお母さん、男の人なんですか？」

訊かなくても解ってほしい、というか、解って然るべきゾーンであると言える。ぶっちゃけた話、アホだ。

《おめーのお袋は男なのかよ！？》

他人からあからさまに突っ込まれると気付くことも多々ある。是非、是非とも、是が非でも、ここで気付いてもらいたい。

「わたしのお母さんは……、岩国……、択真です……？」

駄目だ……。コリヤ駄目だ……。

誰か切にこの女をマトモに戻してやってくれ。「ミスターブレイブ、なんか面白いことになってるみたいだね」

突然だ。この女はいつも突然なのである。岩国神奈、麻里愛の産みの母だ。今は天界において、あの世へ繋がる北の門の受付をしている。

ちなみに変なあだ名を付ける趣味をお持ちのようで、俺もミスターブレイブという横文字を頂いてしまった。

「助けてくれ神奈さん！」

やべーよ、マーチャンがおかしくなっちまったんだよオ！」

この状態はもう、発狂したとしか言いようがない。渦中の二柱のうちの二柱、北の守護神増長天の臨場である。なんとか立ち直ってもらいたい、と言うか神様がわざわざ救済に出向いて来たのだ、立ち直る義務があるだろう。

「おぜうさん、ちょっとよろしくって？」

あたくし、麻里愛の母でございますの」

頼む、地球語で話してくれ……。

「あーら、そうなのでございますの。でもあたくし、こう見えて38なんですのよ、おーっほっほっほ！」

いったいこのオバハン達はなにがしたいのだろうか……。なにやら、意味の解らないライバル意識を燃やしてしまったらしい。

しかし驚きだ。風の噂で30だと聞いていたが、まさかそれより更に8年も長生きしていたとは。しかもくんクイズや慎吾ハイ&ロ―で絶対に金を巻き上げてこれるレベルの若々しさである。

いや、そんなことはどうだっていい。そんなことより今は、麻里愛である。寿春の意味不明な一言によって、生きたまま無間地獄に落とされてしまったこの女をとにかく普通にもどしてやらなければならいのだ。

「おぜうさん、あたくしは男じゃなくってよ？」

あたくしの一人称が彼だったのはどういうことなんざますの？」

いつになつたら普通に話してくれるのだろうか。娘がすぐ横で耳を塞いで長い髪ごと頭を激しく振り乱しているというのに……。

「あーら、ごめんあそばせ。あたくしはただあなたがあまりにも狂暴な方でいらつしやいますから、てつきり男の方なのかと」

もはや言いたい放題だ。本当に、なんと云えばいいのか、どうにも肝っ玉オバハンだ。

神格を持った高級霊俗に言う神様が相手なのである。

「あーら、そーざますの。あたくし、狂暴なんでございますのね……、じゃあ暴れてやるよ」

やっと普通に話す気になってくれたか。そして、俺の望み通り、祟り尽してくれる気にもなってくれたらしい。早く、このオバハンの口を止めてくれ。

「ブレイビー！」

神奈さんは突然俺に新たな二ツクネームを与え、更に左足を鷲掴みにしてきた。

「俺は日ハムの球団マスコットじゃねえ！」

それに足痛えって！」

必死に俺は訴えたのだが、どうやら聞く耳を持つてはくれないらしい。何やら得体の知れない念波を足を通して俺の中へと注入してくる。

そして、俺の体は突き抜けるような心地好い衝撃と共に、カイザーナックルと化し神奈さんの右手に装着されていた。ちなみに武器として具現化された俺は人霊共にダメージを与えることの出来る兵器となる。

お茶の間の皆様には、おそらく独りでくつちやべる寿春に向かつてカイザーナックルが突然出現し、その横で、麻里愛が狂ったように髪を振り乱しているという地獄画図か、緑のバックに赤いチューリップと、黄色い【しばらくお待ちください】というテロツ

プが出ている画面のどちらかを観ていることだろう。

神奈さんは、俺をすっかり握り込んだのシャドーボクシングを開始、対する寿春も、即席で数枚のお札を造り始めた。

そしていよいよ……

ラウンドワン ファイツ！

続く

テイク９ 「ズバリ言っちゃってもいいですか？ 駄目でも言わせて頂きますが

俺は見えてしまった。三枚あるお札のうち、二枚に「ブレイビーは阪急ブレーブスのマスコットだよ〜ん」「日ハムのマスコットはフアイティーだバ〜カ」と書かれてあるのを。

いったいこんなもの、なんに使うというのだろう。貴重なパルプ資源の無駄使い、それ以外の何者でもない気がする。無駄だ。正に無駄だ。

普通に考えて、使い道など一切無いように思われる。問題は最後の一枚だった。これがどう使われるかに勝っても負けてもなんのメリットも無い戦いに巻き込まれてしまった俺の運命がかかっている。

先制パンチを喰らわしたのは寿春だった。だが、先制攻撃を仕掛けたのは神奈の方だったのだ。つまり、神奈が繰り出した右ストリートをかわし、クロスカウンター気味のお札攻撃を受けてしまったのである。

さすがは霊能者の一撃。痛かった。それはそれは痛かった。全国ネットのお笑い番組に出て、ダダ滑った時と同じくらい痛かった。四回も続けて言いたくなるほど痛かったのだ。

寿春は三枚目のお札を真・三国無双の左慈の如く硬質化させ、且つ変幻自在である兵器として使ってきた。どうやら最初の二枚は只単に突っ込みたかっただけらしい。取り敢えずこのことは後で、森林保護団体にご注進に及びつつ芸の肥やしにさせて頂くことにしておこう。

勿論この後団体からぶっ叩かれる寿春をオチとして。

まあ、そのためにはこの苦境を乗り切ることが最低条件となるの

だが……。

たったの一撃でそこはかかない痛みを与えてくださる、非常にありがたいお札のことだ。いくら神奈が神様といえども、たかが高級霊、ひいては元人間である。この痛みに対しは、恐らく後四発から五発ぐらいが我慢の限界だろう。

それまでになんとしても寿春をなぎ倒さなければならなかった。それはある意味究極レベルの不利であると言える状況だ。例えば俺が何に変化したとしても、相手はそれ以上のリーチを作り出すことが可能なのである。喧嘩においてリーチの長さは最重要となる要素なのだ。

「大丈夫だよブレイビー。射程距離でかなわないなら、テクとスピードで穴埋め」

神奈が独り言のように小声で囁きかける。そういえば人は霊体となると、生前に高かった能力が更に高まるらしいという話を聞いたことがある。神奈の場合は生前推理によって行っていた【読心法】が、いわばテレパシー気味に無条件で読み取ってしまう【読心術】に昇華したらしい。

相手が次に繰り出す技が判るなら、それならばもう、リーチ云々以前の問題である。それはもはや必勝法であり、必殺技だ。

次にアクションを起こしたのは寿春だった。お札を持つ手をソフト投げのような形で動かしている。とはいえ、武器として使えるお札は一枚しか無い。投げてくる可能性は、極めて薄いといえるだろう。

投げてこないとなれば、これはもうヨーヨー戦術としか思えない。神奈がそれを察知したのか、早くも左側に身をかわす体勢を作っている。

《ヤッペーなあ……》

この霊体がせっかちなのはいつものことだが、攻撃が来る前での明らかな移動体勢は命取り以外の何にもならないのだ。

……だが、彼女の場合はこれがめくらましとなる可能性があるから油断が出来ないのだ。とにかくにもこの女はフェイント女王なのである。

寿春のお札が真っ直ぐに俺達に向かって伸びてくる。物凄いスピードだ。横浜ベイスターズのクルーン投手の速球（MAX161km/h）を打席で見るところ見えるのだろうか、スピードが早すぎてなにがなにやら全く解らなかった。

そう【気付いたら】もうそこにあっただのである。

さすがは高級霊と言つべきなのだろうか、それとも、さすがは元名探偵と言つべきなのだろうか。神奈はこのハイスピードチャージをいとも容易くやり過ごした。そう、彼女は全くその場から動いていないのだ。あからさまな避けの体勢に惑わされた寿春が勝手にお札を左に大きく変化させたのである。勿論それをテレパシー受信によつて予め察知していた神奈は、寿春の懐へと飛込んで行く。

恐るべき事に番組は、闘う女共を完全にフレームアウトして、麻里愛とシュルムの会話のみで進行しているらしい。

時折、寿春のお札や北の守護神増長天様がフレームの前を高速移動していくが、それはそれで霊現象を捉えた決定的瞬間として番組に泊を付けることになるとの読みがあるようだ。なんとも遅しい商魂である。お茶の間には、一切ヤラセの無い正真正銘の心霊現象が逐一お届けされていた。

寿春の懐に飛込んだところで神奈が一言、
「やばっ」

とのたまった。いったい何がヤバいのだろう。ここまでの流れで都合の悪いところなど一つも無いように思えるのだが。

「巻き付けられる……。もう避けられない」

諦めの境地に達したかのような顔付きで、ヤバい理由を神奈が俺に説明し終えたと同時に俺を右手から外して天高く放り投げた。

タツチの差で難を逃れた俺の目に飛込んできた風景、それは、

「ぎいいやあああああ！」

とのけたたましい悲鳴をあげ、この場から消えて無くなる神奈の姿だった。

「さあて、一件落着。ええと、麻里愛さん、続けましょうか」

まさに瞬殺。北の守護神増長天様を何の躊躇いもなく瞬殺した寿春は、何事も無かったかのように席に戻って番組を続けようとしている。

彼女が持っていたお札には【強制送還】と書かれてあった。

一方的な駆逐を受け終えた俺は、神奈さんとのタッグを強制解散させられたあと、またいつも通りの背後霊としてのポジションを徹底することになった。とはいえ、あのバトルは生放送中のアクションであり、それによって、放送時間がかなり押している。取り敢えず、ブチ切れた麻里愛による陰陽発動は見なくても済みそうだな。それさえ回避することが出来れば、充分に俺の責任は果たしていると言えるだろう。

「ええと、麻里愛さん、とにかく一度でもいいですから、ちゃんとお参りしてあげてください」

どうやら番組サイドも放送の締めには差し掛かっているらしい。アクシデントにより、野球で言えば延長12回裏2アウト、サッカーで言えば、ロスタイムに入っているのだ。妥当な対応であると言える。

「貴方を取り巻く霊的な環境は、決して貴方が思っているほど悪いものではありません。取り憑いている低級霊二体は頼り無いですが、裏切る事はありません」

【頼り無い】このオバハン、本人の前で頼り無いとか言いやがった……。みあげた根性だ。そこに、一体の女霊が帰って来たのだ。俺と同じく麻里愛の背後霊でありながら、勝手に遊び歩く浮遊癖を持つ佐島七海が。

俺と共に頼り無いと罵られた、佐島七海が。

《締まんねえな。どうあがいたって、この流れはバトルだろ》

歯ぎしりによって、地震に見舞われた食器棚のような音を発てる口元、ヤマアラシのように逆毛立つショートカット。鈴なり型の垂れ目だった筈の目は、平行四辺形の吊り目と化している。

俺のすぐ横では、七海の怒りの咆吼が始まっていた。そんな七海を尻目に寿春はカルタ名人のような早業でお札を作成。そこには、

低級霊進入禁止と書かれてあった。

《ちよっ、ちよっ……、ちよっと待てええええ！》

発動されると少し厄介なことになってしまふ。低級霊の侵入を禁じるということは……。

俺の待てコールも聞かずに寿春はお札の効力を発動してしまった。さすがは本物の霊能者。北の守護神増長天様（岩国神奈）を強制的にあの世へと送り還したその力は、俺達を強打者にジャストミートされた打球のごとくいとも容易く撮影スタジオの外に弾き出してしまった。

雄大な大空をチュンチュンと小煩く舞う雀さん達と共に空中を高速移動（吹っ飛ばされ）しながら、俺と同じくすぐ脇を吹っ飛んでいる七海の様子を見してみる。

「うわー、なんかこれ、絶叫マシンみたいで気分爽快だね！」

満面の笑みを湛え、至極ご満悦のご様子。

《こいつ、絶叫マシンフリークか……》

なにはともあれ、これでおそらく七海が寿春に対して余計な恨みを持つこともないだろう。後は番組だが……、吹っ飛ばされている最中を通りがかった時計台の時計を、行きがけの駄賃的にチラ見してみると、時間的には番組は終了しているようだった。

《ああ、良かった……。ちゃんと番組、終わったようですね……》

追伸

麻里愛の話によると、その後赤星拓真（西の守護神広目天様）がスタジオに降臨、すぐにバトルが勃発し、結局麻里愛とシュツルム

によるヨタ話に終始したバツの悪いエンディングを迎えていたらしい。

テイク１１ 【麻里愛の謎に迫る！ １】

アイドルタレント門倉麻里愛。今更ながら俺はこの存在を頗る疑問に思っている。箒に退魔札を貼っ付けて、今俺を追ひ回している麻里愛さん。

その形相は、俺よりも彼女のほうが退魔師に退治されるべきなんじゃないのかと思うほど悪魔的な顔付きだ。

右中段から打ち出された薙ぎをワープしてかわしながら考える。ひたすら考える。何故こんな凶暴な女が【アイドル】になれたのかと。

顔か？ 確かにそれはある。黙っていれば芸能界でもトップクラスの美人だといわれる美女だ。充分有り得る。だが、【黙っていれば】という前置きがある時点でもう既に化けの皮が剥がれている証拠といえるだろう。

麻里愛は、相変わらず俺を打ち倒そうとしてはしくじり続け、こそ泥に侵入されたかのようにカオスな部屋を自らの手でコーディネートしている。……、間抜けだ。

それか？ それが麻里愛がアイドルとして生き残れている所以か？ 見た目の美しさと余りにもお間抜けな性格とのギャップが彼女をアイドルたらしめているのか？

そういえば、ミリ○ネアの時も元ソフトボール部のエースでありながら、野球系の一万円の問題でオーディエンスを使っていた。普通なら有り得ない話だ。

麻里愛は相変わらず波状攻撃を仕掛けてくる。右から左への薙ぎ、そこから取って返す薙ぎ。動きは素早いが、余りにもワンパターンだ。彼女が薙ぐ度に、俺以外の何かが犠牲になっていく。今回の攻撃では、デスクトップパソコン、３０インチプラズマテレビ、何

かの番組の賞品として貰ったロイヤルコペンハーゲンのメモリアルプレートが新たに犠牲者リストに加わった。

これ以上の損害はここから先の俺の暮らしにも影響を出しかねない。今以上に暮らし向きを悪化させないためにも、この辺でわざと攻撃を喰らっておくことにする。

予定通り上段からの打ち下ろしをわざと喰らった俺は、そのまま壁をすり抜けて家の外へ吹っ飛ばされていく。その途中、玄関付近に見慣れた顔を見つけた。その顔は、単体で見たなら見慣れている。だが、それが二つ同じ場所に在ると、どういう訳か、頭が混乱した。血を分けた兄であり、マルチタレントである門倉慶太と、この間の番組出演を契機に見る見る仲良しさんになってしまった霊能タレント河山寿春。この二人が、お付き合ひしているカップルよろしく、お手々繋いで麻里愛宅の呼び鈴を鳴らそうとしているところに出くわしたのである。

「おつす、低級霊！」

行き掛けに屈託のない満面の笑みを浮かべながら右手をシユタつと挙げた寿春からの、失礼極まる挨拶を受ける。

ぶっちゃけそんな挨拶なら、しないでほしい。そんなことを考えながら、何も無かったかのようにのんびりと時間が移ろう街の中を、その空気の流れを破壊しながら猛スピードですっ飛んでいく。

「あー、いーなー。ゆー君一人で絶叫マシンごっこしてるー」

突然脇から声をかけてきたのは、いつぞや絶叫マシンフリークであることが判明した麻里愛専属警備隊（要するに守護霊だ）副長、佐島七海。この女がいつも職務を放棄して遊び歩いてるから、隊長である俺が八つ当たりじみたお被い攻撃の矛先を独り占めすることになるのである。

「おまえなあ、背後霊ならビシツと取り憑いてろよ！ そんな様じやいつまで経っても転生できねーぞ！」

俺や七海のような、一身上の都合により成仏への道を完全に絶たれてしまった不浄霊は、あの世から派遣された守護天使として現世

に生きる者のために尽くすことでしか、転生のために必要な霊的エネルギーを貯めることが出来ないのである。

「んなこと知ったこっちゃ無いわよ。あたしら居なくなつてマアって結構なんでも一人でやつちゃうしさ」

確かにあの女はサポートなんか無くても、一人でなんでも出来てしまう。あの凶暴さや喧しさによってかなり影が薄まっではいるが、典型的な才嬢である。

強いてサポートを必要とする状況を挙げるならば、道に迷った時の道案内かクイズ番組かテストか何かで地理系が出た時のカンニングの手伝いぐらいの物だろう。

「でも……、何だつてあんな頭のいいやつが【おバカ】で売ってんだろうな？」

先に挙げたミリオネアの一万円の問題などは明らかにわざとだしてこずったように見えた一千万円の問題も、今から言えばその様に見せかけていた気配が満々だ。

「なんつうか、見せかけるのが上手いんだよな……」

いつぞやプロ野球の始球式で159km/hの剛球をブン投げ、野球ファンの間で伝説的に語り継がれている麻里愛である。野球のことを知らない訳が無い。にも拘わらず、一万円でのオーディエンス。小憎らしいほどの演出だ。

そのくせ、【あんまん】【アルトバイエルン】【マルセイユ】は本気で言っていたのだから全く頭の良さが目立たないのだ。

相も変わらず御町内を絶叫マシンの猛スピードで強制的に移動させられながら、わざわざそれに追隨してきた七海とともに麻里愛の不思議を考察する。

「諦めか？ 元が天然だから、知性で売っても化けの皮が剥げるって踏んでんのか？」

俺の高速移動にワープしながら付いて来る七海は、昔の記憶を掘り起こしているかのように瞳を右上へと移動させて、右手の人差し指でこめかみをしきりに小突いている。

そして、彼女はこう二の句を継いだ。

「たぶん……、芸能界に入った取っ掛かりが関係してるんじゃないかな……」

そういえば知らない。俺が麻里愛と知り合った時にはもう既にアイドルだった。

「麻里愛はね……」

七海が、俺の知らない麻里愛を語り始める。

テイク１２ 【麻里愛の謎に迫る！ ２】

しかしなぜなのだろう。本来頭が冴えている筈の麻里愛がおバカ路線をひた走る理由。

それはどうやら、デビューした取っ掛かりにあるらしい。

彼女の専属警備隊副長にして、生前は親友だった佐島七海はこう語る。

「あれはねえ、お笑いタレントとして契約してんのよ」

「！？ お笑い！？」

そう言われてみれば、解らなくもない。確かに、カメラの前では意識して笑いを取るうとしている様にも見える。

だがおかしい。何かが腑に落ちない。

「あの顔だぞ！？ 普通に女優とかやってたほうが売れるんじゃないのか？」

そう、問題はそこなのである。どう鼻眞目に見ても、美形過ぎてお笑い向きではないのだ。

「相方が居たのよ、事務所とは漫才師として契約してたわけ」

七海は二の句を継ぐ。

「あ？ 相方は何やってんだよ。もうマーちゃんデビューしてだいぶ経つんじゃないのか！？」

そんなことは聞いたためしがない。自他共に認めるお笑い通であるこの佐野勇氣様が、全く知らないのだ。余程売れなかったのだから。

七海は続ける。

「でも、その相方がデビュー半年でとっとと縁談取り纏めて、引退しちゃったわけ」

いい加減飽きてきたため、高速遊泳を中断した俺は、衝撃の余りぶくぶくに膨れて弾け飛んで消えるという、電波少年的演出をってしまった。

デビュー半年。たったのそれだけで麻里愛さんの漫才師人生は幕となったのだ。その元凶となった傍迷惑な相方とは、一体何者なのだろうか。

人知れず現場に復帰した俺は、呆れながら七海に問う。

「誰だよ、そのやる気のねえ相方は？」

これは酷い。余りにもやる気が無さ過ぎる。どうしてもツツコマずにはいらなかった。

「しょうがないじゃん、その相方、もう死んじやったんだし」

なるほど、それならば確かに、再結成など出来る筈も無い。

「マーちゃんとコンビってことは、俺らと同じぐらいの歳だろ？」

悲惨な奴だな……」

それにしてもあの美女と並んで様になる相手、一体どんな人なのだろう。否、体力を重視して、人外を並べた可能性もある。例えば、マウンテンゴリラや百獣の王ライオン様。よく考えると、そういったもののしか務まらないような気がしてきた。

もしかすると、絶滅危惧種だろうか。象や虎だとしたら、縁談が決まり次第即引退も頷ける。

「その象、なんて名前だったんだよ」

この推測には結構な自信がある。麻里愛程の体力娘には、スケールの大きな相方が必要だ。

「え？ 象って？ 一体何の話なの？」

《！》

象じゃなかったのか？

なら、虎か？

秒速三メートルの足に、ストレートMAX百五九キロの豪腕の持ち主だ。とてもじゃないが、人間の女にその相方は務まらないだろ

う。

「ちっ、虎だったか……」

なぜか七海は明らかに不快そうな面差しを浮かべている。そして、その表情を維持したまま、言葉を繋いだ。

「さっきから象とか虎とか、凄く失礼なことぬかしてない？ その相方はね、フツの女の子だよ、人間の！」

有り得ん。そんなことは断じて有り得ん。あの体力娘にひっぱたかれて無事でいられる女など居る筈がない。

《！》

なぜだろう。どうしてこんな簡単なことに気付けなかったんだろう。全ての元凶は、麻里愛のポジションがツツコミであると思い込んでしまったこと。

「……、ボケか？ あいつ、ボケだったんだな？」

叩かれる側ではなく叩く側なら、人間の女の子にも充分に務まるのだ。

「歳はやっぱ、俺らと同じぐらいだろ？ ご愁傷様なこったな、その相方」

ほとぼりが冷めたであろうと判断し、七海と共にマスター麻里愛のもとへ帰る道すがら、若くして亡くなった相方さんのことを思う。俺は信じていた女に喉笛を掻き切られ、七海は事故死した三日後に親友（麻里愛さん）に婚約者（隆行）を寝取られてしまった。しかも、その現場をその場で目撃している。

結局思い残し（怨念）が強すぎて、二人とも成仏し損ねている。この、事故で亡くなったという相方さんは果たして無事にあの世へ逝けているのだろうか。

「相方さん、ちゃんとあの世に逝けるといいなあ」

「逝けてないわよ。とある女の人に物凄ーい怨みが有って、どうしても成仏出来ないんだってさ、相方さん……」

七海は髪を逆立て、歪んだ顔で笑いながら、やけに詳しい報告をしてくれた。

もはや断定してもいいレベルで情報は揃っているだろう。麻里愛さんの相方は……、

「七海、お前か……」

「ピンポンピンポーン」

そうつことらしい。

追伸

麻里愛さん宅に到着した俺達は、この日一番のサプライズを受けた。なんと、行きがけに会った慶太さんと寿春おばちゃん、結婚なさるらしい。

テイク13 【QOま！！プレッシャースタディ 1】

白を基調とした回答席が十席円形に並ぶお馴染みのセット。その回答席に着くメンバーは、門倉麻里愛、門倉優里愛（競馬騎手）、門倉慶太、門倉慶輔（プロ野球選手）、門倉樹里愛（推理作家）、神林隆行（俳優）、河山寿春、門倉翔一（プロ野球選手）、門倉美和、岩隈竜也の十人である。

つまり、今回麻里愛さんが出演する番組は、QOま！！ 門倉家スペシャル。種目は『プレッシャースタディ』。またまた、地理系が期待できるクイズ番組なのである。

このメンバー内のプレッシャースタディ経験者は、作家の樹里愛、タレントの慶太、寿春の三人。この中で旅行をゲットした者は、ただ一人も居ない。

席順は出演者側が計画的に決められるわけではなく、局側が強制的に決めるらしい。楽屋に詰める麻里愛は、緊張を隠せずにいた。この番組、席順四番、五番辺りから突然旅行のかかったO×クイズの難易度が、格段に増して来るのだ。

「二番か三番がいいなあ」

思わず本音も漏れる。普段高圧的に見えても根はくそ真面目な麻里愛である。そのプレッシャーに押し潰されてしまいそうで、見ている俺のほうがハラハラしている。

今回も出演者に名を連ねていない俺は、言うまでもなく背後霊確定だ。贅沢を言わせてもらえるなら、もう少し佐野勇気として主役を張らせてもらいたいものだが……。

いよいよ運命の瞬間。麻里愛の楽屋に内線が入ってくる。
「えーっ！？」

突然の絶叫。どうやら四番以降が確定したらしい。ウルウルに潤んだ涙目となってしまうた。

ミリオネアのごとく、外しても被害を被るのは自分だけならば問題は無いし、こうまで過度なプレッシャーもかからないだろう。だが、このプレッシャースタディは、一人ミスると纏めてドボンの連帯責任系チームプレイなのだ。

「解りました。ありがとうございます」

ぐったりと意気消沈しながら、受話器を置く。その様子、とてもクイズ番組の席順どころの騒ぎではない。

「ゆーちゃんどうしよう。あたし、十番目になっちゃったよ……」

十番目。この席に着く者に選択権は無い。他の解答者が選ばなかった問題が、そのまま十番目の解答者の問題となるのだ。逆に言えば、いかにして答えやすい問題を、制限時間がギリギリまで迫っている最終解答者まで残すかというところがQ○ま獲得への鍵となってくるのである。

とてもプレッシャーに弱い女とは思えないが、苦手分野がはつきりしているため、アンカーに向くタイプではない。

十番目の知らせに、青い顔をしてプルプルと震えている麻里愛さん。こういう姿を見ると、なんともかわいらしい。

「ご愁傷様。まあ、今日のところはおとなしく震えて、お茶の間の好感度上げることになめな」

黙っていれば芸能界でも一二を争う美女だと言われている麻里愛である。このままおとなしくしていれば、それなりに好感度も上がることだろう。

「時間でーす！ スタンバイお願いしまーす！」
ADの呼び出しがかかる。いよいよ門倉家の豪華海外旅行への挑戦が始まった。

次々と門倉の一族がそれぞれの位置に着いていく。麻里愛が十番目の席に着き、門倉家の方円の陣が展開される。とは言え、本来方円の陣とは外側に向かって展開するものだから、この場合は当て嵌まらないのかもしれないが。

門倉陣営が布陣を終えた後、敵軍総大将である、司会者のお笑いコンビ『びいふかれ』と、アイドルタレントタ日の三人が司会者席に布陣して、いざ臨戦体制が完全に整った。残るは、司会者からの攻撃を最強の防御布陣である方円の陣によって、守り切るだけである。

「Q○まー！！ プレッシュァースタディ門倉家スペシャルー！！」
びいふかれー無山の雄叫びによる宣戦布告により、ついに豪華海外旅行を賭けた大合戦の火ぶたが切って落とされたのである。

「ほとんどの方が初参戦ですね。高学歴のインテリがズラーツと並ぶ中！ 麻里愛ちゃんが十番目！」

タイトルコールの後、個性的な愛らしい顔立ちに意味ありげな苦笑いを貼付けながら無山が叫ぶ。こういうときの彼は、必ず誰かを茶化すときの顔だった。

「ミリ○ネアの一万円の問題でオーディエンスの麻里愛ちゃんが！ 十万円の問題でテレフォンの麻里愛ちゃんが！ 十番目ですよ、十番目！」

やはり来たか。あの顔は絶対に来る顔だったのだ。案の定散々に麻里愛さんをいじり倒す。

「あーら、そのミリ○ネアで一千万円ゲットしたのをお忘れですか

な？」

負けじと麻里愛が指先をピンと伸ばした右手の甲を左頬に押し当てるセレブな動作で一笑に付す。

「そうなんだよねー、取っちゃったんだよね一千万円！」

もう一人のびいふかれ、下山が苦笑いしながら受け答える。

ここまでの舌戦は、門倉家優位で進んでいる感じた。そしていいよ、クイズによる戦いが始まるのだ。

テイク14 【QOま！！プレッシャースタディ2】

「第一問は漢字読み取り問題です。全て『わ』で始まる言葉です」

- 1：患者
- 2：輪島塗り
- 3：蕨餅
- 4：藁人形
- 5：鞋
- 6：山葵
- 7：稚内市
- 8：和寒町
- 9：補助刀
- 10：能と

これが第一問だった。俺としては、10以外全て解るのだが、麻里愛としては7、8当たりが鬼門だろう。なにせ、

『ヨルダンの特産品ってあんまんなんだ』

『ドイツの首都ってアルトバイエルンだよね？』

『マルセイユは……、スペインなんですよ』

の麻里愛なのである。これらのようなワールドワイドなスケールではないものの、読み零す可能性は、極めて高そうだ。

一番の席に着いているのは意外にも慶大卒の河山寿春だ。無山がインテリがズラリと並ぶと言っていたが、今日のメンバーは確かに学歴だけなら相当期待できる。そう、学歴だけなら。

門倉姓は麻里愛以外は全て早大卒（うち慶輔はスポーツ推薦）であるし、岩隈竜也は京大卒だ。

そして、我らが麻里愛さんとその旦那である神林隆行は真に信じ難いことだが……、現役東大生なのである。ほとんどの者が本業とア

ジディック（全日本ディテクティブカンパニー）登録探偵との二足の草鞋をはいている門倉家中では、麻里愛が二年生になった今でも彼女の入試に於ける地理のカンニングの共犯者を大搜索中だ。そして、その際に用いられたカンニングトリックもムキになって暴こうとしている。

逆に言えば、それほど明らかに地理が苦手だと家中に知れ渡っているということになる。おそらく街の名前である7、8が残る可能性は、極めて薄いといえるだろう。ホツとしていいのか、歎くべきなのか。俺としてはいつも八つ当たられる憂さを、こいつの失態を笑い飛ばして晴らしたくもあるのだが。

河山寿春が無難に8番を指定。ディスプレイに【わっさむちょー】と書き込んだ。

ピンポンピンポンという使い古された正解音と共に、解答権が二番手に移る。二番手は門倉家のおかーさま、門倉美和だった。年甲斐も無くツインテイルに結わえた髪が恐ろしいほどサマになっている、鈴なり型狐目の54歳だ。前出の通り、早大卒である。

「ん、9行ってみよかなー」

関西訛りで指定した後、ディスプレイに【わきざし？】と書き込んだ。場内に『ファインプレイ』とのコールが響く。

クイズは、早いペースで進んでいる。制限時間は三分あるため、ペースとしては順調過ぎるほどだろう。解答者は、タッキーこと神林隆行だ。

「4！」

そう宣言して、余裕の表情で【わらにんぎょー】と書き込む。正解を示すチャイムの音が場内に響く。

……、暇だ。いつものツツコミが出せない。別にハワイなど、自分らで何度でも行ける場所なのだから、もう少し俺の芸の肥やしになってほしいものなのだが。この第一問は、10を除けるとそれほど簡単な物だった。つまり、10はそれほどの難問なのである。漢字検定一級を持っている俺が言うのだから間違いない。

果たして、誰が10を答えることになるのだろうか。たぶん麻里愛だとは思うが。もしそうだとするなら、いつものボケとツッコミは最終問題まで纏れ込むか……。しょうがない、ここはギャグ小説っぽく趣向を変えてみようか……。

本日のSBSエキサイト『Qさま!!』、実況の佐野勇気です。

本日解説をお願いした佐島七海さんは、仕事をバツクレて遊び歩いております。予めご了承ください。

さあ、アンサーボックスに入りました、4番解答者、門倉樹里愛、果たして何番を指定するのか!?

「まーに7答えさすのも面白そうだけど……、あたしが答えとくわ」苦笑いが出たあ! この人の一番魅力的な表情は、間違いなくこの【苦笑い】であります。微妙な角度に両端が吊り上がった、薄くて短いパールピンクに染まったぷりちーマウス! 極限まで下がるセクシーな薄い眉! うーん、セクスイー!!

さあ、4番樹里愛、ディスプレイにペンを躍らせます。その姿、正に『Q〇ま!!』のプリンシプルだ!

プリンシプルによって徐々にその姿をあらわにしてきたその文字は、その姿に似つかわしくない、蚯蚓がのたくったような汚い筆跡だ。時間との戦いとなると誰しもがそうなってしまうのか。

出された解答は【わっかないし】であります。あーと、正解のチャームだ!

それにしても、あれが地の筆跡であるならば、担当編集者の苦勞

が僥われます。正にご愁傷様であります。

さて、解答権が5番の岩隈竜也に移ったぞ！ 指定番号は1だ。
ここで1が来たあ！

【わるもの】、ジャストミート！ 甘い球は逃しません！

ここで残るは、2、3、5、6、10の5問だ。六番手慶輔は果たしてどれを選ぶのか？ 早大で固まっている門倉姓の中にあつて、そのインテリ度が唯一未知数だ。スポーツ推薦での入学であります。
さあ、ここで10を選ぶスポ根を見せ付けるのか、昨シーズンパ・リーグ最多勝投手、沖縄シユバルツ門倉慶輔30歳！

悩んでおります、門倉慶輔。チーム内で一番気に食わんと公言して憚らない、玉木知昭捕手とサインの交換をしているが如く、慎重に選んでおります。ちなみに、玉木捕手とのサイン交換は【プロ野球の試合で一番無駄な時間だ】と、他球団からも自球団からも、野球ファンからも審判団からも大変不評であります。

あまりの長さに三秒ルール（球審は、マウンドにいるピッチャーがボールを持つてから三秒以内にモーションを起こさなかった場合、ボールを宣告する権利を持つ）を適用されたことも、一度や二度ではありません、門倉慶輔。

「……、10」

でたあー！ 本日最初の【能と】であります！ さすが名門球団沖縄シユバルツの大エースだ！ 昨年の最多勝は伊達ではありません。根性を見せてくれました！

さあ、解答だ！

ディスプレイには、おそらく誰しもが見た瞬間に思い浮かべただろう文字が浮かび上がりました。【のーと】！ 果たして合っているのか！？

駄目だ、ハズレだー！

さあ、選び直してあります、門倉慶輔。勿論もう一度10を選ぶことも出来ますが、一体どうするのか。数多あるプロピッチャーの中にあつて、唯一一度も敬遠四球を出したことの無い【逃げない漢】

が、再度難敵に挑むのか！？

「くっ……、2だ」

悔しそうだ。これは試合でも見せたことの無いような、悔やみ顔だ。逃げない漢、ついに【能と】から逃げました！

解説の佐島さん、は居ないん……

「えっなに、ケイさんって逃げない漢だったの！？ わたしこの人がいろんなもんから逃げ惑ってるの散々見てるんだけど……」

漸く佐島さんが帰って来られたようですね。振った瞬間帰ってくるとは都合が良すぎる気もしますが、構わず続けましょう。

「あつ、今回のネタ、面白みに欠けるからって実況中継風にしてるわけね？ りょーかい。じゃあわたし、解説でもやってあげるわよ」

佐島さんご本人からの了承も得まして、実況席がフルメンバー揃ったところで、一旦コマーシャルです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7748a/>

液晶画面の向こう側

2010年10月12日05時53分発行